事務局 amateur スタッフによる **フォロー・アップ メモ・ランダム**

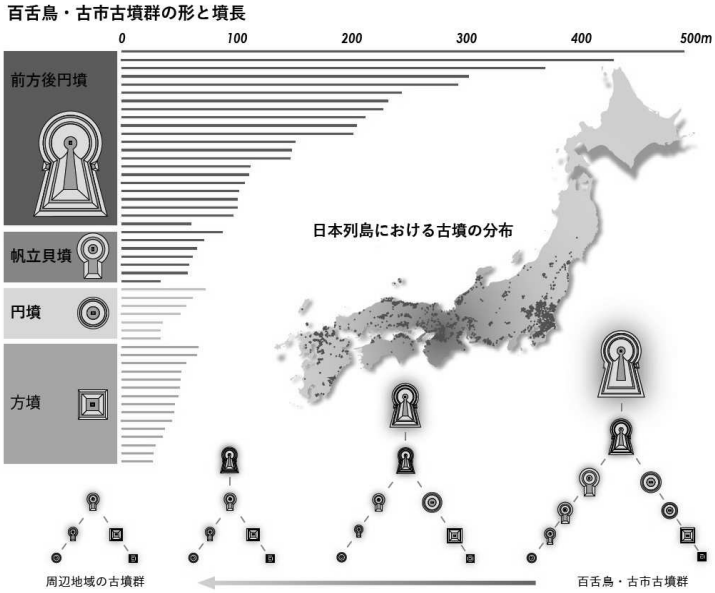
前々回のやよい塾当日に「百舌鳥・古市古墳群」を世界遺産一覧表へ記載することが決定されました。この資産が平成22年11月に暫定一覧表に記載されてから、森本先生はずっと推進活動をされてきました。 前回も述べたように、世界遺産リストに登録されるためは、顕著な普遍的価値を有するとともに、真実性（オーセンティシティ）や完全性（インテグリティ）の条件を満たし、締約国の国内法によって適切な保護管理体制がとられいることが必要だそうです。

オーセンティシティに関しては、構成資産の名称として「仁徳天皇陵古墳」など実在に疑義がある宮内庁の呼び方に一元化していることや、公開が多分に制約されていることに日本考古学協会などが連名で見解を発表しています。

百舌鳥・古市古墳群、とりわけ「大山古墳」についてはその巨大さがセンセーショナルに報道されますが、森本先生のお話しはこの資産の**普遍的価値**に関する真正面からの詳細なお話しでした。世界遺産として顕著な普遍的価値を有していると認められるためには、「世界遺産条約履行のための作業指針」で示されている登録基準のいずれか1つ以上に合致しなければなりません。この資産は文化遺産として6つある基準の内、ⅲとⅳでその価値が認められました。

ⅲ：日本では16万基の古墳が発見されているが、百舌鳥・古市古墳群は、日本古代の古墳時代の文化を代表する類まれな物証である。45件の構成資産は、古墳時代の政治社会構造、階層、高度に洗練された葬送システムを伝えている。

ⅳ：百舌鳥・古市古墳群は、古代東アジアの墳墓築造における類まれな類型である。この独特かつ重要な時代における社会階層の成立に果たした古墳の役割は、土製の像、濠、葺石で補強された幾何学的な墳丘といった有形の属性で、類まれである。



百舌鳥・古市古墳群を規範とした日本列島各地の古墳群の序列的な構成モデル

左の図は文化庁の資料に掲載された古墳の分布図ですが、畿内に大型の前方後円墳が登場した古墳時代の前期から、列島の広い地域に古墳が分布しているのが分かります。畿内の王権勢力が極短期間に列島内に支配を拡大させたとは考えられず、各地の首長が畿内と共通する決め事に基づいて、古墳を築造したと考えられます。そして近畿地方中央部でも、大王を被葬者と推定されるような超大型の古墳の周りにも、それぞれの地域のリーダー的存在の大型古墳が分布しており、まさに古墳が**“群”**として存在していることが、当時の政治社会構造等を今日に伝えている物証だと言えそうです。

畿内王権設立当初は、その勢力に拮抗する複数の有力者がその家格と実力に相応しい古墳を築いていました。時代を下るにつれて古墳の大きさは全体として縮小されていきますが、畿内大王の古墳と地域首長の古墳の差は逆に大きくなり、権力が大王に集中していったことが読み取れます。また、列島各地の古墳からは、同一形状の鉄製の鎧兜が出土しています。大王は半島から伝わった鉄製品の製作技法を独占し、専門の製作者集団を構成して、鎧兜を生産しました。そしてその鎧兜を畿外の有力者に配布することで関係を構築して、西日本から東海、関東へとその勢力を浸透させていったようです。

「百舌鳥・古市古墳群」が**“群”**として世界遺産に記載された重要さは、森本先生が嘆かれるように多くの人に気付かれていません。5月25日に放映されたブラタモリでも、取材の対象とされたのは「大山古墳」だけでした。地形学的視点から歴史や文化を考察するこの番組では、この古墳のすぐ横を走る撓曲崖と言われる地形などから、築造当時は古墳のすぐ横に海岸線があったと推定しています。番組の中で堺市博物館の白神典之氏は、「この時代は海外の人にも権力を示す必要が出てきたので、大阪湾を行き交う船の上から見えるように、古墳を造るという事に意味があった」と解説しています。

文化庁の資料にもこの絵が描かれています。果たして、本当にこのように見えたのでしょうか？

※ 古代史（弥生時代～飛鳥時代）に疑問をお持ちの方、疑問・質問・反論　大募集　（体裁は自由ですが、文書でお願いします）